

## 葉集を読む

松岡 隆子

木の实降る夜も頻りに木の实降る 鈴木 富代

この句のポイントは〈木の实降る〉のリフレインと〈夜も頻りに〉という把握である。〈夜も頻りに〉が上五下五の〈木の实降る〉をしっかりと繋いでいる。秋たけなわ、樹々は一斉に木の实を落とし始める。〈よろこべばしきりに落つる木の实かな〉の風生句のように、秋晴れを落ちる木の实の音は童心を誘うものがある。一方、静かな秋の夜を落ちるその音はしみじみと心に沁みる。やがて過ぎてゆく秋への思いが深まる。〈木の实降る〉のリフレインによるリズム感も好ましい。

シャンパンの空瓶ほどの秋思かな 三宅まどか

ダイナーパーティーも終わり誰も居なくなつたリビングルーム。テーブルを片付けながらさつきまでの賑わいの余韻に浸っている。少しばかりのシャンパンの酔いと多少の疲れとでどこことなく気怠い。キラキラと輝く金色の液体、グラスの

底から立ち上がり弾ける小さな気泡。華やきのあるシャンパンはパーティーには欠かせない。今夜のシャンパンはなかなか佳い味だったなどと思いつつながら、空になった瓶をほんやりと眺めている。…などといった姿を想像した。もしかすると二人だけのパーティーだったかもしれない。それにしても〈シャンパンの空瓶ほどの愁思〉とは新鮮だ。感性の若さが眩しい。

寝つく迄子に秋の夜のアンデルセン 堀 すみ江

子どもが寝つくまで枕もとで絵本を読み聞かせる。今夜は「マツチ売りの少女」。聞いているうちに子どもは物語の世界に入つてゆきそのうち眠くなってくる。すやすやと寝息を立てる顔を覗きながらそつと布団をかけなおしてやる。親と子の平和な時間である。〈寝つく迄〉の一拍のあと〈子に秋の夜のアンデルセン〉とひと息に読み下した調べが美しい。秋の夜ならではの情感が漂う。

風の色してコスモスの花の数 森崎恵美子

赤や白やピンクのコスモスの花が風に吹かれていたる景は今迄にいろいろと詠まれていたが、掲句はそれを独自の視点でとらえており、表現にも新しさがある。風には色がないことを踏まえた上で、コスモスが風の色をしていると捉えるのは詩人の感性である。更に〈花の数〉と数に焦点を絞ることによつて、とりどりの色のコスモスが吹かれ咲いている様を描き出している。